学　生　自　治　会

新津　富央

千葉大学医学部学生自治会復活の経緯

はじめに

「復活の経緯」というからには，以前には存在していたものが一度終焉を迎え，その後復活したことになります。

まずは，千葉大学医学部85年史および百周年記念誌を参考とし，学生自治会の沿革をまとめてみたいと思います。より詳細につきましては，各記念誌をご参照いただけると幸いです。

千葉大学医学部学生自治会の沿革

大正14年５月８日，千葉医科大学創立記念日の記念式典と共に大学学友会の発会式が挙行されました。この学友会は，学生の親交と心身の鍛錬のために，文化部と運動部で構成されていました。翌年以降，新入生の歓迎会を開催し，昭和４年頃より５月の創立記念日前後に学友会の総会，文化祭，運動会を開催していました。昭和７年には10月と11月の交に体育週間が設けられ運動会などが開催されました。これが後の大学祭の起源になりました。

大東亜戦争が迫る社会情勢の中，自由主義，放任主義による学友会は昭和16年３月に発展的解消となり，５月８日の大学記念日に報国団が結成されました。10月と11月の交には約一週間の大学報国祭が開催されました。この時には，運動会や文化的行事と共に大学公開が行われ，現行の大学祭に近い形で開催された最初の大学祭となりました。

戦後，昭和21年２月に千葉医科大学学生会が発足し，報国団は解消されました。昭和24年に千葉大学が成立し，千葉医科大学は医学部として改組されました。昭和28年10月に従来の学生会に代わり，千葉大学医学部学生自治会が発足しました。昭和29年から大学祭は千葉大学全学機構にて開催されることになりました。なお，学園紛争の時代については百周年記念誌をご参照いただけると幸いです。

学生自治会と購買委員会

購買委員会については正確な資料が残されておらず，同窓会の諸先輩から集めた情報を参考にまとめました。よって本章につきましては，不正確な内容が含まれている可能性があることを，あらかじめお断りしておきます。

終戦後の混迷と困窮の中にあり，学業に必要な資材を確保するため，学生は所謂ヤミ市で物資を確保することがあったようです。時期は不明ですが，学生自治会では独自に売店を運営する購買委員会を設置しました。それは，学生自治会の中の一委員会として，連綿と続いていました。学生から集められた出資金により独自に販売員を雇用して，同窓会館で学生と教職員に文具，教材，食品などを安価に提供していました。また，解剖学実習に使用する道具や洋書などを共同購入することも担当していました。

売店は，一時期は大学病院に設置されていましたが，昭和62年頃には閉鎖されたようです。また，医学部本館１階にも設置されていたようです。しかし，顧客のニーズが多様化し多角的な経営が求められる時代となり，学生による売店の運営体制では時代に合わないものとなっていました。当時，「おばちゃん」と学生から親しまれていた販売員の女性達には退職金が支払われ，平成８年頃に発展的解消を遂げたとのことです。

学生自治会の活動であった大学祭は，平成５年の開催を最後に開催されなくなりました。その後，学生自治会は購買委員会による売店の運営という形でのみ存続していました。しかし，売店の閉鎖と共に，学生自治会は事実上消滅しました。

千葉大学医学部学生自治会復活

私は平成９年に入学し，所属した水泳部の先輩から，学生自治会活動の名残であった解剖学実習用具の共同購入係を引き継ぎました。そして，かつての学生自治会と大学祭の存在について知り，学生生活に資する活動を模索していくようになりました。

まず取り組んだのはサークル会館の問題でした。現在のサークル会館は，昭和２年に精神神経科病棟

として建設された，当時としてはモダンな由緒ある建物でした。昭和53年に現在の大学病院が建設された後から，学生サークル会館として使用されていました。私が学生として利用するようになった平成９年頃には，約20年の間に蓄積された古い教科書や資料，故障した備品などが廊下まであふれかえる状態でした。また，トイレや水回りも使用に耐える状態になく，切れかけた照明が点滅を繰り返し，天井の一部に崩落する箇所があるなど，防災上も危険な状態にありました。まさにゴミ屋敷と化しており，その不気味な有り様は夏の夜におばけ屋敷として利用するに相応しいものでした。それまで各部活が大学に対し，個別に修繕の要請をしていましたが，細かな修繕では焼け石に水でした。

またサークル会館以外にも，講義室や同窓会館など学生が利用する施設の老朽化が進んでおり，学生生活の環境は決して良いとはいえませんでした。それは「亥鼻キャンパス」という心地よい響きからは想像もつかない状況でした。

平成13年３月，私はこのような状況を改善すべく，学生自治会を復活させ学生の意見をまとめて大学側に要請することを，各部活の代表者に呼び掛けました。提案は好意的に受け入れられ，同期の篠崎勇介氏や土居厚夫氏が学生自治会発足に向けて積極的に協力してくれることになりました。私と篠崎氏は会則の作成や全学生の承認を得る準備を進めました。そして，全学年の教室を回り，学生自治会の発足趣旨を説明し，承認を得ることができました。

平成13年５月１日，私と篠崎氏を発起人代表とし，千葉大学医学部学生自治会が正式に発足しました。本会は，その目的を「学生の親睦を深め，また将来の入学生も視野に入れて，学生生活の向上をはかること」としました。本部は千葉大学亥鼻地区サークル会館に置きました。当初の活動資金には，購買委員会時代の運営資金の残金を充てることになりました。

発足に際して，当時の福田康一郎医学部長からご祝辞を賜りました。折しも平成16年４月に国立大学法人化を控え，全学をあげて千葉大学の存続をかけた改革が押し進められる最中でした。医学部は平成13年４月に大学院大学化を果たし，医学教育体制の改善，学生生活の環境整備，学生と教官の意思疎通の向上などの必要性が高まる中で，学生自治会の発足は教授会にも好意的に受け入れられました。

５月９日には第１回代表者会議が開催され，役員の選出や委員会の設置，顧問の選出などを決議しました。

役　員
会　長　新津　富央（平15卒）
副会長　篠崎　勇介（平15卒）
　　土居　厚夫（平15卒）
　　唐沢　千裕（平17卒）
書　記　石橋　亮一（平19卒）
　　牧田　美香（平15卒）
会　計　宮原　雅人（平17卒）
　　佐藤　文紀（平16卒）
監　事　手塚　真紀（平15卒）
学年代表　各学年２名ずつ

設置された委員会

サークル会館整備委員会，体育館整備委員会，新入生歓迎委員会，試験日程調整委員会，カリキュラム委員会，環境整備委員会，図書委員会

顧問は，湯浅茂樹教授（旧第二解剖），大沼直躬教授（小児外科），瀧口正樹教授（第一生化学），伊豫雅臣教授（精神神経科）に就任していただきました。

６月11日には，福田医学部長，大沼厚生留学生部会長，湯浅学務委員長，事務担当者らと学生自治会役員らとの会議が開催され，学生側からの要請が伝えられ，その実現性について議論されました。この議論により，老朽化した設備や授業カリキュラムな

搬出された粗大ゴミ サークル会館屋上から撮影

どの現状把握や，緊急性，重要性の認識において，学生と教官の間には相違があることが浮き彫りとなり，改めて相互の意思疎通の重要性が共有されました。

この会議に先立ち，６月９，10日には学生によるサークル会館と体育館の一斉清掃が行われ，写真のように大量の粗大ゴミが搬出されました。その処理には百万円を超える費用を要したとのことでした。この時のサークル会館の環境整備を皮切りに，学生生活の環境整備が進みました。また，新入生の歓迎を各部活が協力して行うなど，部活同士の連携も強化されていきました。正課に関しても，大学が推進する医学教育カリキュラムの改善について議論され，学生の意見が一層反映されていくようになりました。（なお，サークル会館は平成19年に大規模な改修が実施されました。）

亥鼻祭復活へ

平成13年11月，大学創立記念日の休暇中に，私は仲間と栃木県那須岳へ登山に出かけました。三斗小屋温泉に泊まり，仲間と酒を酌み交わしながら，大学の話から猥雑な話まで熱く語り合ったことは良い想い出となっています。その場には，後の学生自治会長となる寺谷俊康氏（平16卒），松本晴樹氏（平18卒），亥鼻祭実行委員長となる吉村健佑氏（平19卒）がいました。

12月に寺谷氏が自治会長となり，組織の改編が行われ，亥鼻祭実行委員会が設置されました。

平成14年３月には医学部長らとの会議が開催されました。そこでは，亥鼻キャンパス内の慢性的な駐車場不足解消のため，テニスコートやグラウンドを駐車場にする計画が議論され，学生側は大学設置基準などを参考に，課外活動施設の重要性やその存続を主張しました。一方で，男子硬式テニス部が廃部にされるという悲しい事件もあり，学生の課外活動における責任や倫理が問われることになりました。

亥鼻祭復活へ向けた布石としては，秋には橋田知明氏を実行委員長とした亥鼻音楽祭が開催され，体育館でバンド演奏などが行われました。

また，同じ亥鼻キャンパスで過ごす看護学生らとの協力体制を整える必要があり，看護学生に看護学部でも学生自治会を発足するように呼びかけました。その結果，平成14年11月に当時の看護学生の岩永睦美氏（平17看護学部卒）を会長として，千葉大学看護学部学生会が発足しました。このように亥鼻キャンパス全体に亥鼻祭復活へ向けた機運が次第に高まっていきました。

12月には鳩貝健氏（平17卒）が自治会長となりました。また，吉村氏が亥鼻祭実行委員長となり，平成15年11月に亥鼻祭が10年ぶりに開催されることとなりました。その詳細は別稿に譲ります。

その後も，平成15年から松本氏，平成17年から柴田涼平氏（平20卒），平成18年から栗本遼太氏（平21卒），平成19年から越塚慶一氏，平成20年から水地智基氏が学生自治会長となり，亥鼻キャンパスの学生のために尽力してくれました。

おわりに

平成16年からの臨床研修必修化に伴い，卒業生が自由に研修先を選択できるようになり，全国の大学病院では研修医が減少する事態が起きました。それは本学も例外ではなく，卒業生の大学病院離れが深刻でした。そのことを受け，当時の顧問を担当していただいた大沼教授は，学生自治会との会議の際，学生から「現状の千葉大の学生への対応では将来千葉大に帰ってきたくならないのではないか」と指摘されたことをご回顧されています（千葉医学雑誌82：245，2006）。そして，「愛校心を育てること」と「学生を大切にする環境整備」の重要性をご指摘されています。

本論で述べたように，千葉大学医学部学生自治会は，当時の学生達が自主的に考えて，行動したことにより，復活させることができました。決して誰かの指示で復活させたのではありません。将来の学生達のためにも，環境整備はもとより，今後も学生の自主性が大切にされていくことを願っています。

また，学生自治会の復活により明らかになったことは，学生と教官（大学の事務も含む）との意思疎通の大切さでした。今後も学生自治会が，相互の意思疎通を良好に保ち，千葉大学における学生生活の向上に資する役割を果たしてくれることを期待しています。

最後に，学生自治会の復活に協力し，医学部を，亥鼻キャンパスを，そして千葉大学を盛りたてようと努力してくれた仲間達や，多くの貴重なご助言をいただいた諸先輩に，心から感謝を申し上げます。また，若輩者の私に対して，本記念誌に寄稿することを勧めていただいた白澤浩教授にも，心から感謝を申し上げます。

（にいつ　とみひさ）